催眠水泳少女

ー催眠術で中年男のチ〇ポ

オマケ小説

おまけ小説

この小説はあくまでも架空の物語であり現実とは一切関係がありません。また小説内で描写される行為を実際に行った場合パートナーが傷ついたり、刑法上あるいは民法上の罪に問われる可能性があります。また、この小説はあくまでも成人向けであり、未成年に閲覧させるべきではありません。

内容

1：俺に支配されたコンビニ……5
2：少女の初勤務……14
3：狂った常識の中で……25
4：ラブホでトレーニング！……40
5：水泳少女のAVDebut……67
あとがき……92

登場人物

暁　瑞希（あかつき　みずき）

本作のヒロイン。青春を水泳にかけるスポーツ少女。最近クラスの男子に告白されて付き合い始めた。彼氏の誕生日にプレゼントを買うためにアルバイトし始めた先で酷い目に遭う。

禿田宅男（はげた　たくお）

クズ男。催眠術を使ってすき放題しているコンビニの店長。今回すでに催眠術で心酔させている南川満子をつかって瑞希がバイトに応募してくるように工作した。

南川清子（みなみかわ　せいこ）と南川満子（みなみかわ　みつこ）

禿田宅男に乗っ取られたコンビニのオーナー一家

1：俺に支配されたコンビニ

俺は禿田宅男、どこにでもいる冴えないおっさんだ。だが、一つだけ普通じゃないところがあるとすれば俺が催眠術が使えることだ。別に特別なことをしたわけじゃないが、若い頃に夢を追いかけてストリートパフォーマーになろうとしていた俺の師匠の知り合いに催眠術師がいたってだけだ。

そのおっさんのもとで若い俺は催眠術を普通に修行して、まーある程度は使えるようになった。だが、その催眠術師はクソ真面目なやつで催眠術の悪用はあかんよと事あるごとに俺に説教していた。そして若かった俺が催眠術をつかって合コンで女子を食っちまったことがバレて、結局俺を破門しやがった。

男で催眠術を使えるなら当然雌を食うだろ？それ以来俺は催眠術をつかって生計を立てている。今では星川学園とか言う学園の近くのそこそこ良い立地のコンビニの店長として一国一城の主になれた。

まぁ、催眠術からコンビニの店長ってのもつながらないかもしれないが、紆余曲折あったんだ。
「おはようございます」
噂をすればなんとやら、俺がコンビニの店長になったきっかけの登場だ。
ゴタゴタ商品在庫が積み上げられたコンビニのバックヤードに妙齢の女性が入ってくる。男ならまず目が行くだろう豊満な胸はぴっちりとフィットする地味目のグレーのサマーセーターで強調され、むっちりとした色香を漂わせるスキニーデニムが人妻の太ももを強調する。
「ああ、これはこれはザーメンちゃん、お疲れ様！」
俺がそうバカにするようなあだ名で呼ぶ。
「もう宅男クンったら、『ちゃん』付けで呼ぶのは恥ずかしいからやめてっていってるでしょ？」
だが彼女が反応するのはあだ名のほうじゃなくてちゃん付けで呼ばれたほうだ。まぁ、熟れた人妻的にはちゃん付けで呼ばれるのは恥ずかしいんだろうが、俺のつけた卑猥なあだ名は催眠術の影響で普通に受け入れてしまっている。

彼女の名前は南川清子（みなみかわ　せいこ）。清子の読みを変えるとせいしになるからザーメンってわけだ。数年前に俺が路上で占い師の振りをして獲物を探していたときに相談してきた女だ。

その時の相談は旦那が脱サラしてコンビニのオーナーになりたがっているというものだったから、これ幸いとばかりに彼女に催眠をかけて乗っ取ったってわけだ。

「ふふ、宅男クン、出勤のあいさつをしますね」

そう言って清子の唇が近づいてくる。俺の体に彼女の手が回され激しく抱擁される。ビールっ腹の醜い俺の腹肉の上で清子の大きな胸が潰れる。

唇と唇がかさなり、匂い立つ雌の香りに包まれる。すっかり慣れた感じで俺の唇の中に侵入してくる人妻のそれ。

「んちゅっぷ…ちゅるるるる…んふぅ…」

唇と唇の隙間から色っぽい吐息が漏れる。何度この体を貪ったかわからない。たぶん旦那より抱いているだろう。俺が手を伸ばして彼女の尻をスキニージーンズの上から揉みしだくともっとしてとばかりに彼女の尻が揺れる。

最初に会った時、丁寧に催眠をかけて何度か占いに通わせると共に俺に心酔させていった。そしてキャリアアドバイザーなどと偽って旦那に会わせて、旦那も催眠の犠牲にしたってわけだ。今では南川家はすっかり俺の管理下にある。

「はんっっ…宅男クンと出勤の挨拶をするとわたしったらいっつも嬉しくなっちゃうわ」

そう顔を赤らめて少女のように言う人妻。

「ザーメンちゃんはこれから仕事でしょ？ちゃんとしてくださいよ」

「うふふ、そうね。宅男クンを困らせちゃいけないものね」

自分がオーナーのコンビニでアルバイトと一緒に働かせられることに全く疑問を持っていない清子。ちなみに、うちのコンビニで一番長時間勤務をこなしているのは彼女の夫だ。

「そうそう、うちの娘の友達のバイトの面接が今日の午後からあるみたいですよ」

「マンコの友達か、いいね。いろいろ楽しみだ」

マンコは南川夫妻の娘の満子（みつこ）のあだ名だ。母親がザーメンだし、娘がマンコなのはなかなかシャレがきいていると思う。ちなみに近くの星川学園の学生でよくクラスメートや先輩でアルバイトを探している娘を紹介してくれる。清子とはちがって胸は小さいがなかなか締まりのいい娘だ。ちなみに満子も結構シフトにはいってくれる。

南川家は俺のお願いは断れないのだ。たとえそれが娘の処女がほしいとか、家族の団らんの時間に旦那をシフトに入れて変わりに俺が母子の体を堪能するとかでも。

「じゃぁ、今日は宅男クンの元気は注入してもらえないのね…」

「ああ、俺の元気棒はしばらくセーブしていくからな」

それから半日後、俺はバックヤードで面接した少女、暁瑞希（あかつき　みずき）、の盗撮映像を見ていた。期待した以上のビジュアル、水泳部で鍛えられた引き締まった体、ボーイッシュな顔立ちが眩しかった。今までのバイトの学園生たちと同じく世間知らずでバイトの適性検査の一環といえば簡単に催眠に落とせ

た。今日の催眠だけではまだかかりは浅いだろうが、どうせバイトで毎週来ることになるんだ。ひと月もあれば、どうにでもなるだろう。今俺の股の間にいる彼女のクラスメートのように。

俺は下校したばかりで着替えてすらいない満子の頭を撫でる。バックヤードでクラスメートの盗撮動画を見ながら勃起させている外道男のチンポを喜んで咥えている。画面の中では瑞希が遠慮がちにめくり上がったスカートの隙間から白いショーツに包まれた股間をせつなそうにゆっくりなぞっている。実におぼこい映像だ。

俺は彼女がオナニーしていた椅子に座り、その盗撮映像を堪能する。机の下では瑞希のクラスメートの満子がペロペロ俺の勃起したものをしゃぶっている。

「瑞希って学園ではどんな感じだ？」

おもむろに俺が聞く。チンポをペロペロしていた満子の童顔が上を向く。清子とは真逆で全然成長しないロリ体型だ。そしてその童顔を強調するようにツインテールにしているのは完全に俺の趣味だ。俺が南川家に入るまではロリ体型なの

を気にしていた満子もすっかり、自分の体型を受け入れてそれに見合ったファッションを俺のためにするようになった。
「ん？…活発な子だよ。友達も多いし、水泳部のエースみたいだし。おにいちゃんとは真逆だね」
そう言ってクスクス笑う。もちろん『おにいちゃん』と呼ばせて、信じさせているのも催眠の効果だ。
「そうか、それは楽しみだなっ！」
そう言って一気に満子の頭をもって押し込むように喉奥に突っ込む。
「んぐぐっ…んっんむむむっ…」
そう、下の方で苦しそうな声が聞こえるが、気にならなかった。よく閉まるロリ喉マンコを使いながら目の前の画面で慎ましげに痴態を見せる少女からすべてを奪うことを妄想する。水泳の代わりにエロゲにはまらせよう。ゲームとバイトと俺とのセックスに忙しくさせてたくさんいる友だちに相手にされなくさせよう。もちろん、今いる彼氏の座に俺がつくだけでなく、今いる彼氏以上の愛情を瑞希から搾り取ってやる。

そう妄想するだけで股間が滾る。まずは徹底的に催眠を深化させてイカれた常識を植え付けてやろう。今日はとりあえずファーストキスを奪ってやった。次はまだ処女のうちにチンポのしゃぶり方を教えてやろう。もちろん本人がエロいことだと認識しないようにして。ああ、彼氏に奪われないようにちゃんと彼氏との性行動はしないように言って置かなければな…。

ぐりぐりと満子の喉奥に亀頭を押し付ける。健気にその暴力的なイラマチオを受け入れる少女。彼女にとってすべてのスキンシップは兄と妹の当然のスキンシップで兄が大好きな妹は当然全て受け入れなければいけないのだ。

たとえその兄が４０を超えた中年オヤジで彼女の実の父より年上で母親の浮気相手だったとしても疑問に思わない。

んふっ…んぐっ…んんむむむんん！

「ほら、もっと喉を締めてよ！」

そう言えばさらに喉がきゅっとしまる。そこにカリ首が締められていい感じになる。

「ああ、いい…いくぞ」

そう言って感じるがままに快感に流され細い少女の喉奥にドピュピュピュピュっと射精する。そのうち瑞希にもこうしてやるとの思いを込めて。

2：少女の初勤務

数日後、瑞希の初勤務の日だ。もちろん俺は彼女を待ち構える。他の日はサボっても、この日だけは来なくちゃな。

「こんにちは！今日からお世話になります！暁瑞希です」

そう元気よく叫んで入ってくる瑞希。流石に体育会系らしい元気の良さでハキハキしている。

「ああ、お疲れさま。じゃぁ、まずいろいろ手続きするからバックヤードに奥の扉から入ってきてよ」

俺がそう言う。俺の顔を見たときに少しだけ彼女の眉が嫌そうに動くのを見た。最初の面接の時に催眠状態で俺の第一印象が最低だってことはわかっていたから驚かない。むしろここから変えていくのが楽しみなのだ。

バックヤードに入ってきた瑞希は初めて会った時と変わらずなかなか魅力的だ。スラッとした体つき、少年のような顔立ち。今日も学校帰りなのか制服だ。

「じゃぁ、まずは挨拶のキスだね。覚えてる？」
そう当然のように言う。瑞希の表情が固まる。
「…はい」
嫌そうに言うが、催眠で俺の指示は当然のことだとして受け入れるようにしてあるからいやいやでも彼女は疑問には思わない。
「じゃか、今日はまず瑞希さんからしてよ」
そう言って、唇を突き出してみせる。面接の時にファーストキスを奪った唇が今日は向こうからくるのだ。
「え…やらなきゃダメですか？」
そう逃げ腰の瑞希。
「だめだよ。瑞希くんは部活で顧問の先生に嫌なことを指示されたら断るの？よくそれで水泳部やってられるよね」
そう煽って唇を突き出す。数秒葛藤して彼女の柔らかい唇が俺のカサついた唇に重なる。そのタイミングで俺は彼女の体を抱きしめた。無駄な筋肉を削ぎ落としたスリムなボディが俺の肥満体と密着する。

「いやぁぁぁ！」
そう叫んで瑞希が俺をはねのける。まだ会って二回目、好感度が低いのだ。だが、タイムカードを押す度に彼氏と好感度が入れ替わる暗示があるので、俺は余裕だ。どうせそのうち彼女の方から俺を抱きしめるようになる。
「何するんですか！？」
「アルバイトの体を抱きしめて体調をチェックするのも店長の仕事なんだ」
言い訳がましく適当なことをいう。
「そうなんですか…でも…いきなりはやめてください」
こじつければ瑞希は納得したようだった。
「じゃぁまず、名札のために写真をとる必要があるから制服脱いでくれるかな」
既にかなり嫌な顔をしている瑞希が更に不快さをあらわにする。
「脱がなきゃだめですか？」
「ゴメンね、仕事だからさ」
かなりきつめに嫌だと伝えようとする瑞希に俺は大人らしく仕事だから仕方がないと伝える。腹の中で爆笑しながら。

「うーん…しかたないですね…」
そういって瑞希は体育会系らしく思い切って服を脱ぎはじめる。俺の目の前で10代のみずみずしい白い肌が学園の制服の間からさらされ始める。完全にストリップだ。
「上だけじゃなくてスカートもね」
そう軽い感じで言うと瑞希は俺の方をにらみながらもこくんと頷いた。
制服のベストが床に落ち、ネクタイがほどかれ、ブラウスのボタンが外れる。灰色の無地のスポーツブラが彼女らしい。そして腹筋が割れているのもやはり鍛えている証でなかなか趣深い。催眠を覚えてからいろんな女の体を俺のオナホにしてきたが、瑞希は新しいタイプだ。早く使いたいと股間が固くなるのを感じる。
「じゃぁ、写真撮るね」
スポーツブラとショーツ、それに学園指定のソックスとローファーだけになった瑞希にカメラを向ける。相変わらず彼女のボーイッシュな顔立ちは不快そうに眉を逆立てている。

カシャカシャその顔を撮り、全身をカメラに収める。さらに近づいてショーツのどアップを取って、ついでにスジを写そうと彼女の股間に指を伸ばす。
そのとき、彼女の手が伸びてきて俺の指を払った。
「さわらないでもらえますか」
不機嫌な声でそういう瑞希。いいね、この少女がどう変わるか想像すると股間がますます硬くなっちゃうよ。
「わかったよ。でもその不機嫌そうな顔だとお客さんが逃げちゃうから、ちょっとは笑顔になってよ」
そう言うと、瑞希の顔がひきつった笑顔に変わる。いやいや笑顔をしていることが丸わかりの笑顔だ。
「じゃぁ、制服に着替えてよ。上着はコンビニのユニフォームがあるけど、下の方は決まったのがないからこっちで用意しておいたよ」
そういってロッカーを指差す。スポーツ少女がそのロッカーを開けて絶句する。

「え、これですか？今から家に行ってジーンズ取ってくることもできるんですけど…」
彼女が嫌がるのはムリがない。俺が準備したのはウルトラローライズのデニムショートパンツ。ローライズ過ぎてケツが半分見えるほどのやつだ。
「ダメダメ、今こうして問答している間にも時給発生してるんだよ。初めはすこし恥ずかしいかもしれないけどすぐに慣れるから」
ちなみにうちの店は男性客多めだ。というのも他のコンビニと違って店員が女子多めで、ぶっちゃけ全員エロ目の格好をしているからだ。コンビニのユニフォームの上着の下にシャツなどを着ていないせいで時々汗で透けブラをするし、下半身も常に体のラインが出るセクシーなスキニーデニムやローライズショートパンツなどを着せている。
流石にケツ丸出しのショートパンツは初めてだが、水泳少女に着せるならこれ以外思いつかなかった。
「…うーん…」

いやいや納得した感じで瑞希がそのショートパンツに足を通す。学校指定のソックスやローファーとのアンバランスが最高に背徳感を高める。

「じゃぁ、まずはレジに立ってみようか」

そう言って彼女の肩を抱き寄せようとするとするりとよけられる。レジで俺が横に立って指導しようとしても常に10センチ程度の距離を取ろうとする。まあ、好感度が上がるどころか下がることしかしていないから、ここまでのところは想像通りだ。

むしろ今しか楽しめない反応だから俺はニヤニヤチンポを勃起させながら懸命な彼女の抵抗を楽しんだ。まぁ、そうはいっても半ケツ丸出しのローライズパンツの学園生は見ているだけで誘うものがあるがな。

そして彼女の初勤務の時間が終わる。最後に再びバックヤードに呼び出す。

「今日はどうだった？」

「恥ずかしかったけど、結構なんとかなったと思います！」

恥ずかしかったねぇ、俺のニヤニヤが止まらない。眼の前にはローライズパンツからむき出しの鍛えられた白い太ももがまるで俺に視姦されるためにあるようにむき出しにされている。

そこで俺は彼女に催眠状態に落とす音を聞かせる。羞恥心に耐えるためにぎゅっと握られた拳から力が抜け、彼女の表情が嫌悪感と疲労の入り混じったものから催眠状態の無表情へと変化する。

全身が弛緩した彼女に俺は聞く。

「今日はどうだった？」

「最低…でした。イヤ…もうやめたい…です。特に店長が…ムリで」

淡々と嫌悪感を口にする。先程まで憎しみを隠していなかった彼女の瞳が今は光を宿していない。それにもかかわらず、深層心理まで俺への嫌悪感が刻まれているのだろう。

「ダメだよ。一度初めたからには彼氏のために頑張らなきゃ。嫌なのは初めだけだから、すぐに慣れるよ」

強制的に瑞希の感情を書き換える。実際初回の暗示があるから嫌悪感があっても彼氏の誕生日プレゼントを買うお金を貯めるためという目標のためにバイトしていれば徐々に俺への嫌悪感は薄まっていくはずだ。たとえ今の時点で最低だとしても。

「彼氏のために…頑張る。嫌なのは…初めだけ…すぐに…なれる」

切れ切れのちからない言葉。催眠状態だから当然だが、同時に彼女の無意識の抵抗のようでもある。

「彼氏のためにもっと頑張ろう。彼氏のためにシフトを増やすよ」

「んん…彼氏のために…頑張る。…彼氏のために…シフトを…増やします」

出勤すればするほどその彼氏への好感度が俺への好感度に置き換わるのにね。

「さぁ、手をたたくと君は目をさますよ！」

そう言ってパンパンと手をたたく。ハッと瑞希が目を覚ます。光のない瞳に俺への憎しみの炎が戻ってくる。

「瑞希さん、シフト週1じゃ流石に少なすぎるから、土曜日も入れていいよね？」

間髪入れずに聞く。
「ええと…土曜日は部活か…もうすこし遅い時間なら大丈夫です」
遅い時間ね。いいね、いろいろ遊べそうだ。多分これで瑞希はバイトを辞めるということを考えなくなっただろう。なんと言っても彼氏のためだからな。

3：狂った常識の中で

瑞希が来て一ヶ月、そろそろ研修期間も半分だ。

「お疲れ様でーす！秃田店長！

チュッ！」

挨拶代わりのキスもそろそろ慣れてきた。勤務１０回目だから出勤と退勤に面接のファーストキスをあわせて２１回目だから、当然だ。彼氏の知らない唇はとっくに俺とのキスに慣れてしまっている。

「…んちゅっ…ちゅぷっ…ちゅるる…」

今週に入ってからは彼女に積極的に舌を入れるように指導した。バイトは店長の舌に自分の舌を絡めて勤務中のフィーリングを一致させるとか適当なお題目で納得させた。

舌をまだぎこちない感じで絡めてくる瑞希の口技を楽しみながら彼女を抱きしめる。初回のときには払いのけられたが、今ではすっかり受け入れている。部活

終わりの塩素の香りの残る少女の髪の毛を嗅ぐ。彼女の背後に回した腕を少し下ろせば引き締まった水泳少女のヒップが制服のスカート越しに触れる。制服のプリーツスカートのヒダヒダの上から尻の丸みを感じても彼女は抵抗しない。普通ならただの痴漢だが、彼女にとってはバイトの業務の一環だからだ。

「んちゅ…ちゅる…ぷはぁ」

「今日もいいキスだったよ。やっぱり１０代女子のキスは気分がいいね」

積極的に業務をこなすアルバイトを褒めるのも店長の努めだからね。

「もう…禿田店長ったら。清子さんとのキスもアツアツじゃないですか。ボクもはやくあんなふうにできるようになりたいです」

最近やっと体育会系らしくバイトでも積極的になり始めた瑞希はオーナーの清子からいろいろ教えられているようだった。まだ処女の少女が人妻から手ほどきを受けていると思うとそれだけで期待が膨らむ。

「ちゃんと毎日マンズリしてるんだろ？すぐになれるよ」

「もちろんちゃんとしてますけど…」

疑わしそうにそうこたえる瑞希。だが実際既に効果は出ている。はじめてあった時と比べて女らしさが増した気がするし、フェロモンのせいか彼女の体から漂う塩素の匂いに混じって微かに甘い女の匂いがし始めている。

「ほら、着替えて。バイト心得を唱和しなよ」

「ハイ！」

素直にそう答えて、俺の目の前で服を脱ぎ始める。羞恥心など感じていては仕事にならないからな。毎週彼女の体をこうして観察できる。筋肉質な裸で胸も普通くらいのサイズだが、だからこそ締りが良さそうに感じる。

制服がロッカーにしまわれ、青いシンプルな学生らしいブラとショーツがあらわになる。以前は地味なスポーツブラばかりだったが最近きちんとブラをつけ始めたあたり彼女自身も無意識に女を感じ始めているのだろう。

「せっかく脱いで開放的になったから、そのままバイト心得を唱和してよ」

俺が彼女にそう指示する。

「脱いで開放的になった…ですか？秃田店長相変わらず意味分かんないですね」

「やらない？」

「まぁ、やりますけど。ボクはバイトで禿田店長の指示には従わなきゃいけませんから」
なんだかんだ言って、最近は俺の指示にはだいたい従う。ボディタッチも拒否はしないし。
俺に向かって瑞希が休めのポーズを取る。そしてスマホを出して俺が送った『暁瑞希のバイト心得！』を確認する。これを送るのを口実にメールアドレスを聞き出したってわけだ。
「じゃぁ、『暁瑞希のバイト心得！』を唱和するので聞いてください！」
体育会系らしくハキハキと大きな声で読み上げる。やっぱりスポーツ少女はこうじゃなくちゃね。
「一、　ボクはバイトなので禿田宅男店長を愛するよう努力します！」
中身には疑問を持たないあたりが素晴らしい。実際、徐々に俺のことが好きになっているはずだ。前のようにあからさまに憎しみをぶつけてくることはほとんどなくなった。

「一、　禿田宅男店長のご命令に従うのはボクの喜びです！バイトのボクは禿田宅男店長には絶対逆らいません！でも優しくかわいがってくださると嬉しいです！」

理想的な雇用関係ってやつだね。今後も心得は増やしていってやろう。そしてやっとバイトの制服に着替えた瑞希が言う。

「じゃぁ、タイムカードさして、店に出ますね」

何も知らない彼女がいつものようにタイムカードを打刻する。一回一回の変化は目に見えるものではないが、この瞬間確かに彼女の俺に対する好感度が上がって彼氏に対する好感度が下がっているのだ。そしてそろそろエロいこともさせられると考えて、俺が声を掛ける。

「瑞希さん、ちょっとレジに立つ前に注意しておきたいんだけど、最近少し表情硬いよ。接客のキモはなんと言っても笑顔なんだから

「そうですか？」

あまり納得のいっていない顔のスポーツ少女。とは言え、上からの言葉に表立って反論しないのも体育会系のいいところだ。

「そうだよ。だからちょっとレジに出る前に笑顔になるためのスマイル体操をしていこうか。当然、やってくれるよね？」
「はい、よろしくおねがいします！」
「じゃぁ、その場でしゃがんで？」
事務椅子に座っている俺の前に立っていた瑞希にしゃがませる。がに股の体勢で腰を下ろさせる。ケツが突き出され、不安定な蹲踞姿勢だ。そして何より瑞希の目線が俺の股間のあたりになる。これから何を指示されるのかわからないと行った感じの不安そうな瞳がズボン越しに俺のチンポを見ている様に見える。まだほとんどエロいことを知らない少女は今の自分の格好がどれほどエロく、どれほど男を誘うものか知らないだろう。まっ、それも俺がこれから親切にも教えてやるがな。
「いいか、瑞希さん。どんな時に女性が一番笑顔になると思う？」
そう問いかける。
「えーっと、好きなものを食べたとき…とか？」
突拍子もない質問に戸惑っていながらスポーツ少女がこたえる。

「ちがうね。男の性器と一緒にいるときだ。メスはオスの生殖器官を見て笑顔になるのは当然なんだよ。だから、これから瑞希さんには俺のチンポを出してもらう。これは瑞希さんが笑顔になるという仕事の一部で当然のことなんだよ。さあ、まずは俺のチンポを出してみてよ」

そう当然のように言う。仕事のことなら俺の指示に従うように暗示をかけられている瑞希は納得の行かないという顔をしながらも手を動かし始める。

ジーっと音がして10代の白い指がジッパーを引き下げる。慣れない手付きがどうしていいかわからないと戸惑いながらもズボンの中に侵入してくる。もっこりと膨らんだ俺のパンツを瑞希のほっそりとした指が撫でる。

「男の下着には穴があっていつでもチンポを出せるようになっているからね。探して俺のチンポを引き出してよ」

これから起こることを考えるとドキドキして瑞希の指がパンツ越しに触れるのを感じながらチンポが固くなっていく。

そしてついに瑞希の普段プールで水をかいてる白魚のような指が俺の勃起しかけの浅黒い男性器を捉え、不安げな指使いでパンツから引き出す。ヒッと瑞希の声が漏れるのを感じる。初めて見る男の生殖器官の威容に驚いたのだろう。

「大丈夫。このチンポは普通のチンポと違うよ。ただの仕事道具、瑞希さんを笑顔にするためのスマイル注入棒だから気にするなよ。ほら、笑顔笑顔！」

不安そうにしながらバイト中は俺の言うことに従うようになっている瑞希はぎこちない笑みを浮かべる。

「ほら、もっと笑顔になれるはずだよ。スマイル注入棒を握って、にっこりしてみてよ」

状況に納得がいっていない表情だが、チンポではなくスマイル注入棒として仕事の一部になってしまえばもう、なかなか拒否はし辛い。彼女の口角があがり、困ったような顔を残しながらも不自然な笑顔になる。

カシャ、すぐ側においておいた俺のスマホで微妙な笑顔の瑞希を取る。本人の眉が逆立ち、勝手に撮影されたことの不快感を口にしようとする。

「ほら、これをみて、ちょっと微妙な笑顔でしょ？

ほら、清子さんの写真だけど、ほらすごいいい笑顔でしょ。きちっとスマイルしてるでしょ？」
そう言って今しがた撮影した瑞希のぎこちない笑顔の写真を見せて、スワイプして清子が俺のチンポに頬ずりしながらピースしている写真を見せる。
「たしかに、そうかも…」
盗撮されたことに対する不満はどこかに行って納得した表情の瑞希がさっきよりもより自然な笑顔になる。スマイル注入棒を使っているのが自分だけでないという安心感と先輩のバイトの模範的な姿を見せつけられて彼女は納得したのだろう。
「ほら、納得したら今度はスマイル注入棒を笑顔で見つめながら、手を上下に動かして扱き上げて」
すっかり萎えかけたチンポを勃起させるための指示を出す。
「ハイ！」

いつもの彼女らしいハキハキとした返事とともに俺のチンポを包む白い手が上下し始める。興奮した俺の体温より彼女の指の温度は低いせいか少し涼しく感じるのも水泳少女っぽくてなかなかいい。

「いいけど、もう少し強くてもいいよ。あと、笑顔を忘れてるよ」

注意すれば完全にナチュラルな笑顔をつくって俺のチンポをしごき始める。今後しばらくこの条件付を続けて、どんなに怒っていてもチンポを見れば笑顔になれるように教育しなければ。コンビニのバイトの店員とか、自分がどんな気分でもちゃんと笑顔で接客できなきゃいけないからね。

そんなことを考えながら少女の涼し気な手コキを堪能していると、徐々にニチャニチャと先走りが瑞希の指を汚し始める。

「よーし、透明な液体が出てきたろ？これがスマイル準備液だ。これがでてきたら、スマイル注入棒の先の部分を指でなでて、準備液をまぶして、準備液が出てくる穴を3回人差し指で閉じたり開いたりしてみて」

「こ、こうですか？」

慣れない指使いで瑞希が先走り液をかき混ぜればかき混ぜるほど泡立った俺の体液が彼女の指につく。間抜けな尿道口の開け閉めも１０代の少女が真剣な顔で取り組んでいればなかなか笑えるショーだ。
「じゃぁ、最後だ。スマイル注入棒から直接男性フェロモンを得て、笑顔になるために咥えてみてよ」
「え？これをですか？」
「そうだよ、他のバイトの女子はみんなやってることだよ。初めは慣れないと思うけど、慣れたらすぐにみんな笑顔になれる特訓だからね。ホラ、手伝ってあげるから口を開けて」
そう指示をすれば彼女の好むと好まずにかかわらず、口が開く。彼女はバイトであり、バイトは俺の言うことを聞く者だと暗示が生きているからだ。
そこで俺は彼女の切りそろえられたショートヘアの頭を掴んで一気に俺のチンポを咥えさせる。
「んぐぐぐぐぐぐっっ！！かはっんん…んむむむ！！」

一気に突っ込んだことで彼女の喉が痙攣する様子が亀頭越しに感じられて独特の快感を生み出す。吐き戻そうとする生理反応を頭を押さえつけてぐりぐりすることで押さえつける。

「んむむむんん、んふんっ…んん…」

流石に水泳をやっているだけあってすぐに鼻で息をし始める。とは言えイラマチオで喉奥まで突っ込めばそれでも息は通らない。

「ほら、いっちに！いっちに！舌をスマイル注入棒に絡めろ」

命令しながら髪の毛を掴んで瑞希の頭を上下する。

「んむむむんっんふんっっぐっっ…あむんっ」

瑞希の舌が口の中でのたうつのを感じる。ザラザラとした温かい肉ひだが俺の竿にこすれていい感じだ。舌技の才能があるのかもしれない。

「おら、もう一回。いっちにっ！いっちにっ！」

ガチガチに勃起したチンポで瑞希の口を占領する。ついこの間ファーストキスを俺に捧げたばかりのティーン・エイジャーの口を既に征服している。健全な色合いの唇のあいだに男の欲棒をつっこみ、白いきれいな歯にチンポの垢をこすり

つけ、喉奥に亀頭をぐりぐり押し付けている。しかもそのうえ彼女に舌で奉仕までさせているのだ。
まだ未熟な口技と乱暴なイラマチオの合わせ技で口の中を堪能する。これができるのはまだ慣れていない今だけなのだ。
口内は暖かくて、ヒダヒダが気持ちいい。彼女が苦しげに息をする度にのどから吐き出される温かい息が俺の竿をくすぐって出ていく。
そしてついに彼女の口内の征服がクライマックスをむかえる。
「かはっ…んんん！」
今までで一番奥深くに突っ込み、そのまま彼女の口内の締め付けを感じながら一気に痙攣とともに射精する。
「んぐっんぐっんむむむむむ…」
息をするために俺の出したザーメンをどんどん飲み干していく瑞希。その喉の動きが射精後に敏感になったチンポをさらに刺激してますます心地良い。
「ふはぁっっ～、良かったよ、瑞希さん。まだ、瑞希さんは慣れてないみたいだから今後しばらくはこのスマイル体操の練習をしていこうね」

ズルリっと射精して脱力したチンポを少女の狭い気管から引き出す。尿道に残った最後のザーメンを瑞希の健全な赤い唇でふにふにと拭く。赤い唇に白濁色のザーメンがついている光景はいつ見てもエッチだ。

「はぁっ…はぁはぁはぁ…は、ハードです…」

そういった瑞希が肩で息をしている。まだ何が起こったのかよくわからないまま衝撃を受けているのだろう。いまは仕方がない。すぐにきちんと自分でスマイル体操をできるようになるからね。

「じゃぁ、トイレで身だしなみを整えていつもどおりレジに立とうか」

もちろん彼女に何が起こったか考えさせる余裕は与えない。俺が掴んで乱れた髪の毛を整え、唇のザーメンを拭いたらいつもどおりの通常勤務（セクハラ付き）が待っている。彼女に唱和させた心構えの通り『禿田宅男店長のご命令に従うのはボクの喜びです！バイトのボクは禿田宅男店長には絶対逆らいません！でも優しくかわいがってくださると嬉しいです！』を実行させるのだ。

4：ラブホでトレーニング！

瑞希がバイトに来てから2ヶ月ちょっとたった。すっかり好感度がクラスメートの彼氏と俺とで逆転し、つい先日情熱的な告白とともに俺に初めてを捧げてくれた。今日は二人でラブホテルに来ている。

スポーツ一筋の学園生らしいジーンズとポロシャツ姿の少女がはじめてのラブホテルで所在なげに俺を見ている。

「ほら、ここなら一緒に特訓ができると思ってね、瑞希。僕が痩せるためのストレッチに付き合ってくれるんだろ。ここなら広い風呂もあるし瑞希と二人っきりでも誰にも見られないよ」

「う～ん、そうかも知れないけど…」

そう言いながら瑞希がシャツに手をかけて一気に脱ぎ去る。ワイヤーの入っていない薄い三角ブラが淫靡なラブホテルの淡い光に照らし出される。そしてこの間徹底的にオナニーをさせ、勤務ごとに俺にチンポを咥えさせた成果か、これか

ら行われることを期待して彼女の控えめな乳房の頂点がぷっくりと勃起しているのがみえる。控えめな胸を無理やり寄せて谷間を作るそのブラから溢れる白くて健全な瑞希の肌を早くむしゃぶりつきたくなる。

「この前オススメしたブラ来てくれたんだね」

そう言うと、すこしせつなそうに、嬉しそうな表情で瑞希が笑う。余談だが、ウチのコンビニはセックス関係のアイテムも取り揃えている。俺の暗示下にある女たちに俺の好みの下着などを着せるためだ。瑞希も今月から購入し、給料の3分の1と引き換えに俺の選んだ下着やバイブなどを受け取って俺の好みを自ら実行するのだ。

「でも…すこし恥ずかしいかな」

それまで、ほとんどスポーツブラしか持っていなかった瑞希がはにかんで笑いながらジーンズを脱ぐ。超ローライズのやはり白のショーツがあらわになり、既に股間の部分が濡れているのを感じる。

「かわいいよ」

そう言って俺は瑞希を抱きしめてローラーズショーツからこぼれた尻肉を揉み上げる。
「んん…宅男くん…ちゅっっ…ちゅぷ…じゅるるる…んじゅぷぷぷ…んんふぅ」
瑞希の唇が自分から重なってくる。俺の気持ちいいポイントを抑えた最高のキスだ。
「んん、ちゅる…宅男くんの…ちゅぶぶぶ、唾液ぃ…じゅるるる…おいしいよぉ…」
俺のつばを吸い上げ、口蓋を瑞希の舌が媚びるようにマッサージする。俺が興奮してローライズのショーツ越しに瑞希の引き締まったケツを揉むと、今度は瑞希の手が俺のチンポをマッサージしてくる。
「んふぅぅ…ああ、いいよぉ。宅男くんとキスするの好きなのぉ…」
そう言いながら離れる。
「でも、今日はエッチじゃなくて、宅男くんが痩せるための筋トレだからね」
そして瑞希は極小のブラを外す。既に興奮して可愛らしく勃起したピンク色の乳首があらわになる。そしてそのまま、ウルトラローライズで股間の部分がしみ

になっているショーツも脱ぎ去り、俺の前で全裸になる少女。引き締まった体も、まだきれいな性器もすべて俺のものだ。

「じゃじゃーん、今日は宅男くんがリクエストしてたインターハイのウェア持ってきちゃったよ！これを着て宅男くんのトレーニングを手伝っちゃうよ」

そういって水着に足を通す。彼女が普段使っている競泳水着だ。彼女の部屋でヴァージンを破った時から何度か着せている。これを着せると、瑞希の方も高まるらしくエッチが激しくなるのだ。

「じゃあ、宅男くんも脱いでよ。ストレッチできないよ」

そういってベッドの上に押し倒した俺のシャツを剥ぎ取りにかかる。ラブホの巨大なキングベッドの上で俺をそのスレンダーな体で組み伏して、立ち上がれないように俺の左右の足のあいだに瑞希の太ももをあらわにした足が絡みつくように差し込まれる。もともと瑞希のほうが体力があるから抵抗できない事をいいことに、無理やりシャツを剥ぎ取る。積極的に俺を剥くのは彼女らしくて楽しいからお気に入りだ。脱がせる過程で少女の体があちこち俺に触れる。少女の匂いが

鼻をくすぐり、瑞希の水着に包まれたささやかな胸が俺の胸にぶつかる。否、当ててきているのだ。俺に恋してしまった少女の積極的なセックスアピール。
「ふふ、ぷよぷよなんだから♪ちゃんとボクがダイエットさせてあげるからね。次は下の方だね」
そういってまるで獲物を狙う猫のように俺の下半身を彼女の瞳がロックオンする。長くて細い指がさわさわと股間をなでる。そしてそのまま彼女の指が器用に俺を押し倒した状態でベルトをカチャカチャとはずして、ズボンを脱がす。
「も～、これからやるのはストレッチだよ。なんでおチンポ勃てちゃってるの？」
ふざけたように軽い調子で言う瑞希、ついこの間まで処女だったが、丁寧に仕込んだおかげですっかり男の一物を弄るのは得意になってしまっている。ついこの間まで見たこともなかった水泳一筋のスポーツ少女も今では中年オヤジのチンポ絶対咥えるガールってわけだ。
「もう仕方ないんだから～。チンポばかり鍛えちゃって」
「ふひひ、強いチンポじゃないとみんなを笑顔にできないからな？」

「そうだよね。おチンポは女子バイトのみんなを笑顔にする『スマイル注入棒』だもんね～」
そう瑞希が俺が信じさせた間違った常識を披露する。
「そうそう、瑞希はスマイルかな」
そういってベッドサイドに転がっていたスマホを見せる。
「もちろんだよ。大好きな宅男くんとこれから一緒にトレーニングできるから楽しくて最高のスマイルでーす」
カメラに向かってチンポに頬ずりしながらピースする競泳少女。彼氏が見たら卒倒しそうな絵面だ。ちなみに、瑞希にはバイトのことも俺のことも彼氏には秘密にするように指示してある。誕生日にサプライズするためだと言ってある。まだ瑞希の彼氏にはイロイロ使いみちがありそうだからな。
「俺達の自撮りじゃん。瑞希のスマホの待ち受けにしてくれよ」
「え～、恥ずかしいよ。でも、宅男くんのお願いならボクしてあげたくなっちゃうな、ふふ、後でね」

瑞希はこの通りもはや俺の言いなりだ。幸せそうに恋する少女の瞳で俺の頼みは何でもきいてくれる。
「さ、全部脱いだらお風呂にいこう？ボク最近、ストレッチだけじゃなくてマッサージも練習してるんだ」
嬉しそうに俺の手を握ってラブホテルの広い浴室に導く少女。
「じゃあ、まずはこのマットの上に立って。ボクがフォームを教えてあげるから」
そう言って瑞希が俺にエアマットの上に立たせる。
「じゃぁ、まずは手を前に伸ばして、足は肩幅くらいで」
そう言いながら瑞希が背後から俺の両手を握って体と直角になるように調整する。素肌に後ろから密着した瑞希の水着のザラザラした感触、そしてそれに包まれた控えめな思春期の少女のふよふよとした胸を感じる。
「もうすこし、足を開いたほうがいいかも」
そう言って彼女の足が俺の両足の間にはさみ入れられる。背後から密着してまるで瑞希が俺の一部になったように感じる。

「いいよ、宅男くん。じゃぁ、この体勢でスクワットしてみて。腰はすこし低めなくらいまで落として。バランスを崩しても、ボクが倒れないように支えてるからね」

そう言って、俺を安心させるようにケツに太ももを押し付けてくる。

「い～ち」

そう言いながら、瑞希が俺の体を誘導するようにスクワットの動きをさせる。密着感が増して、爽やかな十代のフェロモンに包まれる。くいっとケツが落ちると引き締まりながらも、みずみずしいハリのいい瑞希の太ももが俺の汚い贅肉まみれの太ももを支えてくれる。

「に～」

そう言いながら再びスクワットさせられる。だが、今度は背中に感じるものがあった。2つの突起が背中にあたっている水着の感触越しにある。俺はわざとそこにこすりつける。

「さ～んっっふぅぅん…」

暗示のせいで敏感になっているのか、毎日オナニーさせているから体ができあがっているのか、たったそれだけで瑞希が声を上げる。
「んん、だめだよ～、イタズラしたら。じゃぁ、スクワットの次はヒップリフティングやるね。このマットの上に横になって、少し股を開いてね」
大の字に寝かせる瑞希。そして彼女は俺の足の間に座ってくる。
「じゃぁ、大の字の状態で腰を浮かせてみて。少しきついかもしれないけど、頑張ってみてよ」
そう言われて、俺は膝から腰までを浮かせる。ブリッジの下半身だけのような体勢だ。
「そうそう、がんばってる宅男くんかわいいよ。じゃぁ、ボクからご褒美だよ」
そう言って瑞希が俺の目の前でローションのボトルを取り上げると挑発的に立ち上がって、腰を前に出しながらトロトロと普段彼女が部活で着ている水着の上に垂らす。ローションがトロトロと胸の谷間を伝う。スポーツのための水着にエッチのための卑猥なローションがトロトロ垂らされていく。
「もう少し食い込ませたほうがいいんだよね」

そう言って彼女がローションの流れを意識しながら、股間の部分を引っ張って食い込ませる。普通の着方では絶対にないほど、食い込んで盛りマンが水着越しに強調される。

「最近股間の部分だけ伸びてきちゃってるんだよね」

そう、まるで誘うようにクイックイと腰をひねる。この動きも、水着を食い込ませてハイレグにするのも、そして目の前で強調されて水着越しに盛り上がった肉の丘陵に指を食い込ませてマン筋を強調させるのも俺の好みだ。やっぱ水着でプレイするなら外せないしね。瑞希がヴァージンを俺に捧げた日、一晩かけていろんなエロプレイを仕込んだ。瑞希は「愛する」俺のために一生懸命バカみたいにエロいことを覚え、最近自主練までしている。気が向いたらわざと部活時間中にポーズを指定させて学園からエロ写メを送らせたりしている。

「ふふ、思春期の水泳部員にこんなことさせちゃって、本当に宅男くんはヘンタイなんだから」

そう言いながら腰を突き出す。ヒップリフティングで中に浮いた俺の腰に向けて突き出された瑞希の競泳水着が食い込んだ股間があと少しで触れそうになる。

そしてトロトロと垂れてきたローションが引き締まった腹をすぎて、食い込んだ盛りマンに誘導され、マン筋を伝う。すっかり、水着越しに少女の肌で暖められたローションが体温を移すかのように俺の股間に垂れてくる。
「もうちょっと、頑張ってみよう。宅男くんが頑張ってくれたらボクももっともっと頑張っちゃうよ」
いたずらっぽく微笑んで瑞希が再びローションを胸に垂らす。そして今度は形の良い胸全体にそのローションをもみ広げていく。
「んふぅっ…もう、ただのストレッチなのにぃ…んはぁ…」
そう言い訳がましく言いながらも、彼女の手の動きはいやらしくまるで誘いかけるようだ。吐息はすでにスポーツの健全なものから艶めかしい女のものに変わり、何より彼女の胸の突起がテラテラとローションで濡れた水着の上からでもわかるほどに勃起している。
「そろそろキツイかな。肥満体の中年オジサンなのに、頑張ったね。やっぱり宅男くんにはエッチなご褒美が一番だね。
あと、もうちょっとだけ頑張ってよ。ボクが支えてあげるから」

そう言いながら、瑞希がゆっくりと大抵を落として中腰になる。ちょうど俺が腰を浮かせて高い位置を維持しているチンポと彼女の肩が同じぐらいの高さになる。

「あはっ、勃起してる勃起してる。彼氏の宅男くんがこんなにガッチガチのバッキバキに勃起してくれるなんて、ボクも彼女として嬉しいよ」

そう言いながらローションを再び彼女の手に垂らして、それを指の隅々までヌルヌルに広げる少女。ローションの使い方に慣れているところなど、水泳少女というよりまるで娼婦だ。これも俺の教育の賜物だ。バイトの瑞希は店長の俺の言うことには疑問を持たない暗示のせいでするする変態的なテクニックを教育できる。

そしてトロトロになった右手で俺の竿を握る。左手が金玉を優しく撫で回しふにふにともてあそび、俺の興奮を高める。

「あと、十秒だけ頑張ろうね、宅男くん。そしたらご褒美をあげるから」

そういいながらも彼女の手が優しく、まるで焦らすように俺の竿を扱き上げる。絡みつくしっとりと彼女の体温に暖められたローションが浴室のエアベッドにこぼれていく。
「はぁ…はぁ…宅男くんのおチンポ熱いよぉ。ローション越しでもわかるよ！…ふぅん、ボクの中に入ってきたいんだね。よ～し、よ～し」
そう囁くように言いながら彼女の細くて白い指が赤黒い俺の陰部をトロトロのローションとともに這い回る。皮をめくりあげて、カリ首をなぞる。優しくも存在感のある強さでゆっくりと竿を扱き上げる。
ふだん水をかき分けている白いほっそりとした指がクリクリと尿道をほじる。
「瑞希、キスしてよ。俺のチンポに」
そう頑張っている俺はおねだりする。
「ふふ、宅男くん頑張ってるからいいよ！」
そう彼女面して嬉しそうに微笑んで、少女の淡い色合いの唇が血色の悪い赤黒い俺の肉に近づいてくる。
「んちゅ…♡ちゅぶ…ヂュルルルル♡」

そう柔らかい唇が俺のチンポにキスをする。まだ俺の唇とチンポしか知らない唇が触れる温かい感触がある。そしてすぐに彼女の舌が尿道を軽く刺激しながら先走り液を吸い上げ始める。まだ化粧っ気がなくて清純な唇に似合わない迷いのない男に快感を与える尿道口キス。

瑞希の彼氏にもそのうちキスぐらいさせてやろう。俺のケツ穴を舐めて、ションベンを飲むのに抵抗がなくなったらな。

「もういいだろ、我慢できない」

「んぷっ…ちゅぷぷぷ…チュルン！そうだね。宅男くん、よくできました！もうやめていいよ」

そう言って彼女の手が俺のケツに這わされ、腰を下ろしても痛くないように気を使う。

「もう、ただのストレッチなのに、こんなに興奮しちゃって…ほんっとに、宅男くんヘンタイなんだから」

そう言って笑う彼女の表情に嫌なところはどこにもない。むしろ嬉しそうでさえある。

「じゃぁ、次は基本中の基本、腕立て伏せだよ」
「えー、もう疲れた。だるいから普通にエッチしようよ」
当然のように次の運動に入ろうとする瑞希に俺が待ったをかける。彼女と違って運動に慣れていない俺はいくらおままごとの運動でもムリだと。
「大丈夫、宅男くんの大好きな運動だから。まずボクが横になるね」
そう言って横になる瑞希。スリムな体型の肢体がエアベッドに投げ出される。興奮しているらしく、浅く呼吸しながら上下する形の良い胸。ローションでテカテカになった水着越しに乳首の勃起がひと目で分かる。そして横になったまま彼女は食い込ませていた水着の股間をずらす。ピンク色の肉ヒダがあらわになり、既に濡れそぼったそこが物欲しげにヒクヒク震えている。俺の好みにより陰毛はきちんと剃り上げてある。
「さ、ボクの上で腕立て伏せをしてよ」
そういって彼女が俺の方を見る。引き締まったからだを彩るスマートな競泳水着はローションで淫猥に濡れそぼり、彼女の秘部は物欲しげにひくついている。入れやすいように水着をずらしている指が震える。

「ほら、きてよ。寒いよ」
そう同世代の彼氏に誘いかけるように言う瑞希。俺は彼女の少し俺より背が高くて、俺よりもだいぶスリムな体に覆いかぶさった。彼女と目が合う。ニコッと微笑んでうなずくのは俺にすべてを委ねた証だ。
「じゃぁ、入れるよ」
「うん…きてっ！」
その言葉には切なささえ漂う。俺の下で震える成長期の肢体。その引き締まった下半身に向けて魔羅をゆっくりと落としていく。幾度も征服して、自ら俺に支えられた体を味わうために。
先端に湿った温かい感触。少女の体が温かい沼のように俺のものを受け入れていく。ズブズブと入っていく。
「んっ…ふぅ…宅男くんの…んん…おチンポだぁ」
その言葉には一欠片の忌避感もない。ただただ彼女として彼氏の一物を受け入れ、締りの良い女肉で締め付けてくるのだ。
「はぁんふぅ…入ってきてる。んふぅ…すっかりぃ、慣れちゃったね」

その言葉の通り、すんなり入っていく。ヴァージンという壁も、男の物に慣れない狭い膣ももはやない。俺のために入った先から締め付けてくる温かい肉ヒダに、必要に応じて一気にキツイほどに締まる水泳で鍛えられた筋肉だけだ。

「じゃぁ、いくぞ」

そう言って腰を一気に打ち付ける。

「いいよ。きてぇぇぇんっふぅぅぅ！」

毎日オナニーで感度をあげさせて成長期の肉体を淫靡に成長させている瑞希の体が嬉しそうに俺の分身をくわえ込む。絡みつくように締まる感覚、ヒダヒダが愛おしげに俺の竿を包み込む。

彼女の肩の上あたりに手をついて文字通り腕立て伏せのような体勢で腰を沈ませる。俺のでっぷりと太った胸板が彼女の形の良い胸を押しつぶす。ヌルヌルの水着越しに感じる痛いほどに勃起して布地を押し上げている乳首。下半身の力を抜くとともにズブズブと彼女の温かい肉壺に俺の分身が入っていく。

「あぁぁぁんっふぅぅぅん…キてるよぉぉ。あんっ、深いぃぃ♡んんっぁあ！これっ♡イイイのぉ♡んふぅ！」

彼女の手が俺の背中に回される。ふだんのクールそうなスポーツ少女の顔が快感に歪んでいる。
「うんっ…はぁぁ！そこ！そこのいいよぉ♡キスしてぇ」
多分彼氏と付き合って、もし彼氏のエッチが上手ければ瑞希は俺の代わりにそいつに対して乱れていたかもしれない。まぁ、まずありえないが。
「んちゅっ…ちゅぷっ…チュルルル」
ゆっくりとお互いの体を波打たせながらキスをする。瑞希の唇がねだるように俺の唇に重なり、貪るように舌が挿入される。催眠で感度をあげ、思春期の体に性の快楽を植え付け、そして俺への好感度を刷り込んだ。俺好みの変態的な常識を当然として、瑞希はすっかり性の虜になってしまってる。
「んんっ…ちゅぶっチュパッ…レロレロ…んふぅ…。宅男くんとキスしてるとぉ…あぁぁぁん…どきどきしちゃうのぉ…はぁんんん」
そういいながら、催眠がなければほとんどありえない女子学生からの熱愛に身を任せる。
「んんっ…もっと強くしてもいいんだよ」

耳元でおねだりする。彼女の彼氏もクラスメートもふだん水泳一筋の瑞希が男に抱かれながらこんなに可愛らしくオネダリするなんて想像もしないだろう。
「瑞希がほしいだけだろ！」
そういって腰を一旦引いて一気に打ち込む。
「んんんっっ、そうなのおおお！ふ、深いところにィィ♡…んふぅぅ…宅男くんのぉ、おチンポほしいのぉぉ！」
俺を求める彼女の抱きつきはさらに強まる。しがみついていると言ってもいいほどだ。少しでも快感を貪ろうと腰がくねる。
「一気に行くぞ！トレーニングだからな」
そう言って腰を一気に出し入れする。パンパンっと肉と肉がぶつかりあう生々しい音が瑞希の喘ぎ声と連動する。
「はぁぁあんん、いいよ！キテぇ…ぁぁあああんん！はんっっ、力強いよぉ♡んふぅぅん…エッチの筋肉だけはぁぁ、すごいのおお！ひゃぁんん！ボクのマンコぉぉ…んふぅぅっえぐれちゃってるうう！」
「瑞希のマンコもいいぞ」

お互いの体温を重ね合わせながら感想をいいながら腰を振りまくる。
「んふぅぅんん！た、宅男くんのおチンポもいい、イイおぉぉ！硬くてぇぇ、ボクのイイところ責めてくるのぉお」
「ココだろ？」
そう言いながら瑞希の子宮口をグリグリ痛いほどに固くなった亀頭で押しつぶす。
「んぐんぐんぐん！そう、ソコ、しょこがいいのぉぉぉ！ボクのこと全部わかってりゅううう、チンポぉぉ！あむんんっ…はぁぁん！だいしゅきなのおおおぉぉ！」
その言葉とともに瑞希の足が俺の腰に回される。筋肉質な水泳少女の足が俺のケツを圧迫してより深くチンポを咥え込もうとする。
「おぃ、腰が動かせないぞ。トレーニングできないじゃないか」
「いいの、もうそんなにょぉぉ、もっとボクのオマンコぐりぐりしてぇぇ！宅男はぁぁ…ああん、エッチがうまいから他のことはぁぁ、イイの！全部ボクがやってあげるのおお！だから、チンポだけ鍛えてえええ！」

「しかたねえな、一気に行くぞ！」　その言葉通り俺は全体重をチンポに乗せてグリグリチンポで瑞希をエアベッドに押し付ける。
「ひゃぁんん！しょう、これ、イイイ！ボク、しゅきいいいい！イキしょう！イキしょう！イっちゃいしょうなにょおおおお！」
膣肉が喜びとともに俺のチンポを締め上げてくる。まるで締め付けだけで俺を射精に導こうかというほどの快感。
「いいぞ、瑞希。最高の肉穴だ！」
「ありがとぉぉ、このチンポも最高なのおおお。ああああああ、イッちゃううううう！」
そう絶叫する。直後、瑞希の膣全体が痙攣する。締め付けだけでなくですっぽりはまっている俺の肉棒をより愉しませようとするかのように全体が震える。足が俺のケツを固定し、チンポを一番深いところにグイグイ押し込む。愛おしそうに俺の背中に回された瑞希の手が密着度を高める。

まるで俺たちは一つの肉の塊だった。圧倒的一体感。瑞希の周りの人間は彼氏も友達も親さえも、瑞希がこんなふうにオスの体の一部になれることをしらないだろう。一気に俺は体を揺らす。一体化した瑞希の肉体が連動して揺れる。

「ひゃぁぁぁぁぁぁぁぁんん！イッたばかりにゃのにぃぃ、しゅごいよおおおお！」

絶頂する瑞希。

「俺はまだイッていないからな」

そう言ってグイグイ彼女の肢体を俺の肥満体で押しつぶしながら体を前後に揺らしていく。

「ひゃあああんっ、これしゅごいいいい！宅男くんとひとつになってりゅううう！あああああんっっ、またイッちゃうう。ちんぽしゅごぃぃいいいい！！」

叫びながら締め付けを一層きつくする瑞希。彼女が絶頂する度に俺のチンポを締め付ける媚肉全体がまるで電動オナホのように痙攣する。普段体力で俺が勝つことが出来ないスポーツ少女が俺の下で快感に屈服する。グニグニとチンポに媚びてくる十代のエロ穴。

「ひゃあああん、らめっらめっ、らめえええええええ！！」
「俺もイクぞ！」
「うん、キテえええ。瑞希のエロ穴にぃぃ、宅男くんの子種汁だしてええ！」
更に密着度を高めながら叫ぶ瑞希。俺のザーメンを一番奥で受け止めようとする。そして俺はギュッギュッとまるでチンポ汁を搾り取ろうとするように俺のことを愛する十代少女に欲望汁を遠慮なく吐き出す。
「はぁぁ…んんっ、ドクドクって宅男くんの出てるぅ♡女の子を笑顔にするのボクの中に出してくれてる…んはぁ♡」
そういって嬉しそうに笑顔で俺の唇に吸い付いてくる。まだ、激しい射精感が続いていて、そこに少女のピンク色の長い舌が絡みついてくる。
「はむ、ちゅっぢゅぶぶぶ！ジュルル、れろっれろろろ」
口内をまるで内側から愛撫するかのような激しいキス。
「よかったぞ、瑞希」

「うん、でももっともっとトレーニングしよ！もう宅男くん動かなくていいよ。ボクが全部やるから♡」
「そうか？」
「ふふ、だって、宅男くんが痩せたらこんな激しい種付エッチできなくなっちゃうじゃん。だからぁ、宅男くんは変わらなくていいの。代わりにもっともっとボクにエッチなトレーニングして」
「じゃあ、俺の好きなエロゲやAV買って練習してよ。次の週末は俺好みのメイドプレイ教えてやるからさ」
「え…。でも来週の日曜日は大会があるから…」
そういって渋い顔をする瑞希。だが、もちろん俺はそんなの認めるつもりはない。それにもうこのメスガキの扱い方はわかってるんだ。
「でも、俺は瑞希ともっともっと仲良くしたいんだ」
そういって今度はこっちから吸い付く。じゅぶぶぶぶぶっと下品な音を勃てて少女の甘い口内の空気と唾液を一気に吸い上げてクッチャクッチャ俺の口の中

で混ぜてから、舌に乗っけて吐き戻す。すぐに嬉しそうに絡みついてくる瑞希のサラサラとした舌。その間、俺は彼女の黒髪をなでてやる。
「んぢゅ、じゅるるる。じゅぷっ…じゅぱぱぱ…んふぅんん。も、もう、仕方ないなぁ。じゃあ来週の週末はボク風邪を引いちゃうかも。元気になれるようにたくさんボクに宅男くんのオス汁ちょうだいよ」
そう言う彼女の瞳はキモオタ中年の見にくい顔を見るものではない。まるで白馬の王子様を見る恋する少女の瞳だ。

5：水泳少女のAVDebut

「いやあ、瑞希さんの彼氏がうちに来てくれて嬉しいよ。おかげさまでこうやって家族で食事ができるんだから」

そう南川祥介（みなみかわ　しょうすけ）がいった。午後7時過ぎ、南川家のダイニングで家族の団らんが営まれている。俺はリビングで体をふかふかのソファに体を預けて、隣には南川清子、暁瑞希がすわり、甲斐甲斐しく俺の給仕をしている。足元では南川満子が甲斐甲斐しくおれの太ももをマッサージしている。

満子はロリ体型に合わせたパステルカラーのティーン向けのファッション、瑞希は陸上のトレーニングウェア。そして清子は白い清楚なワンピースだ。

「そうね、祥介。彼、すごい真面目に頑張ってくれるから助かってるのよ」

そう少し離れたリビングから清子が旦那であり、コンビニオーナーの祥介にむかってこたえる。

「ハイ、宅男さまあーん」

そう言って清子、俺の呼び名はザーメンちゃんが愛情たっぷりの肉じゃがを差し出してくる。

「もう、私の作ったハンバーグも食べてよぉ！」

そう言って反対側から瑞希が口を挟む。俺の指示ですっかり女の子らしくなって俺の前ではしおらしくも自分のことを『私』などと呼ぶようになった。

「わかってるって。チン負けちゃんのハンバーグもたべるから。

もぐもぐ……これうまいな」

瑞希のあだ名はチン負けちゃんにきまった。チンポを突っ込むと何でも言うことを聞く素直なマンコって意味だ。チンポのために大会を欠席し、部活をやめて、進学も諦めて、いまでは週7でバイトに出ているからだ。もともとの真面目な性格のせいか最近はザーメンちゃんからエッチなテクニックを練習中だ。料理を最近作らせているのもチン負けちゃんが女の子らしくなるための一環ってわけだ。

ちなみに、現状の締め付けや体型を維持させるためにちゃんとジムに通わせて、よりエッチなことに特化した体を作るように指導中だ。

「まったく、みんな楽しそうだね。瑞希さんは親御さんに許可はとったのかい？」
リビングと繋がっているダイニングでコンビニの廃棄飯を暖めずに食べている祥介が口を開く。
「ハイ、もちろんです。母さんもすっかり宅男さんのことが好きだからエッチしてもらえるなら何日でも泊まっていいって言ってました。ひゃんっ、もう宅男様ったらぁ、瑞希の乳首いじらないでぇぇ」
瑞希の母親も思った以上にいい感じだったので最近コンビニのパートに来てもらってる。初めは瑞希が出られない時に代わりにと強引に呼んだのだが、娘同様催眠にかかりやすかったのか簡単に俺に恋に落ちた。そういうわけで、瑞希が俺のオナホだったり、あだ名がチン負けちゃんなのも親公認ってわけだ。
「マンコちゃん、ちょっと足がつかれたから舐めてマッサージしてよ」
そう父親の前で娘に命令する。
「もう、宅男様ってば人使いが荒いんだから。でもマンコのことかわいがってくれるおにいちゃんなら、仕方ないね」

そう言って童顔の少女がいたずらっぽく舌を出すと俺の足の親指ジュプジュプと口をつけて一本ずつ舌でマッサージし始め、ツインテールの黒髪が俺の足の上で揺れ始める。小さな舌がこそばゆいが、その背徳感にむくむく俺のものが大きくなる。

「マンコちゃん、最高に可愛いよ。特に舌使いが最高だわ」

そうダイニングの父親に報告する。普通ならガチギレ案件だが、この俺に支配された家では違う。

「宅男様にそう言ってもらえうと僕も鼻が高いです。学校の勉強なんかよりメスは性技を鍛えたほうがいいってのは真理でしたね」

「そうよ、祥介。マンコは進学塾に行かせるより宅男さまのオナホとしてずっと同棲させて正解でしょ」

「ハハハ、そうだね。僕が間違ってたよ。それに満子の教育のためにも宅男様を我が家に招きたいと言ってくれたのに嫌がってごめん」

「そうよ、粗チンなんだから。デカチンポがないと我が家はとっくに家庭崩壊してたわ。そうですよね、宅男さまぁ」

しなだれかかった大人の色気を出しながらマンコが唇を寄せてくる。ボリュームのあるおっぱいが俺に押し付けられる。
「確かにそうですね。俺がいなかったらマンコちゃんは一流大学に行って、ザーメンちゃんはそこの粗チンといっしょにコンビニ経営に勤しんで今頃、全員仲良く旅行とかい行ってたかもしれないね」
「んちゅ…れろっ…どりゅ…んちゅっぷ…んはぁ。まぁ、ひどいわ。そんなの。デカチンポに屈服する幸せも宅男様とコスプレエッチする幸せもないなんて」
「んっちゅ、ちゅる、クソ祥介パパ。チュパッチュチュ…わたし一流大学でヤリサーにレイプされてたかもしれないんだよ。んれろ～ちゅる…チュプププ。宅男様の妹になって一生オナホ扱いされる方が百倍マシなのに、わからないなんて！」
そう娘が父親に抗議する。
「ごめんごめん。もう宅男様のお言葉には逆らわないから。宅男様に指導していただくことが幸せだからね」

「そうだよ！クソ祥介パパでもわかってるじゃん。宅男お兄ちゃんの言うことに間違いなんてないんだよ」
「そうよ、あなた。忘れたの？宅男様を我が家にお招きした時に、二人でエンゲージリングを捨てて誓ったわよね。宅男様の命令に従うのが私達の幸せだって」
「そうだよ。宅男様のおチンポが最高に気持ちいい以上、宅男様にお使えするのが幸せなのは当然です。母さんもすっかり幸せになっちゃったから」
「全くお前らすっかりチンポに負けちゃいやがって」
そう言って、雑にザーメンちゃんのワンピース越しにそのよく売れた２つの果実を弄ぶ。どぎつい色のエロブラが白い清楚なワンピース越しに透けて見える。ワンピースは旦那と付き合ってた頃によく来ていたものらしい。そしてもちろんブラは俺が着させている真っ赤なレースのブラだ。
「それより、そろそろ私に新しいバイトさせてくださいよぉ」
耳元に息を吹きかけながら囁く瑞希がいう。彼女もおねだり上手になりつつある。もちろんエッチなおねだりだ。
「よーし、祥介は店に出てろ。俺たちはこれからAV撮影するからな」

そう俺が言うとみんなバタバタ動き始める。祥介は食べかけの廃棄弁当をゴミ箱に放り込んで立ち上がり、マンコちゃんとザーメンちゃんは機材を取りに行く。

「じゃぁ、僕は店に出てますのでよろしくおねがいします」

「ああ、撮影終わったら編集はお前の仕事だからな。娘の同級生の無修正AVつかえるなんてマジ役得だな」

「まったく。クソ祥介パパって変態さ～ん」

カメラを片手に戻ってきたマンコちゃんが言う。娘にそう言われながらもヘラヘラ嬉しそうに祥介は笑って礼儀正しく一礼して夜勤に入る。これから娘と嫁が自分より年上の怠け者に一晩中犯され、それを翌日にはビデオで見せつけられながら自分で編集することになるのにな。

「じゃぁ、始めましょうか。新商品のAVの撮影。ほんと、宅男様は天才よね。アルバイトのAVを撮影して販売するなんて、お店の宣伝にもなって、オリジナルの商品も作れて一石二鳥だわ」

「ほんと、そうだよね、ママ。おにいちゃん、天才！」

マンコちゃんとザーメンちゃんがリビングの照明を落としてピンク色の間接照明に変えながら口々に褒めそやす。ソファの背もたれが倒され、ベッドになってその上にマンコちゃんがシーツを掛けていく。さっきまで普通の家のリビングの真ん中にベッドが出現し、ピンク色の照明が卑猥に照らし出す。

女どもがテキパキとAV撮影のために南川家のリビングルームをまるでラブホの一室のように変えていく。自分たちが無償で商品にされるのにも抵抗を示さない程度にきちんと俺は三人を飼いならしている。いずれ飽きたら、風俗店にでもして、下のコンビニの商品に従業員のAVだけじゃなくて従業員そのものを加えてもいいかもしれない。

「宅男様、準備が整いました」

そう言ってザーメンちゃんがカメラを構える。俺はさっきまでソファだったベッドに腰掛ける。その上に陸上のユニフォームを着た瑞希が座る。部活をやめて肉が付き始めた小ぶりな尻が俺の太ももの上に乗り、勃起しかけのチンポがそのクロッチ部分に当たる。

「じゃあ、始めて」

俺の言葉とともにまずマンコちゃんが立ち上がってザーメンちゃんがカメラをそっちに向ける。ピンク色の間接照明をバックにツインテールに黒とピンクのボーダー柄のティーンズファッションに身を包んだマンコちゃんがニコニコと調子よく喋り始める。マイク代わりに持たせた極太のディルドーがティーンズファッションと対象的な背徳感を生み出して最高にエロいね。

「カメラの前のわたしのエッチなお兄ちゃんたち、ひさしぶり～！この前のわたしのエッチなDVD、『お兄ちゃんのためならどこでも裸になっちゃうヘンタイいもうと二十四時』は楽しんでくれた？ガチの一発撮り二十四時間のわたしのエッチな映像でたくさんシコシコしてくれたら嬉しいな。あ、わたしの働いてるコンビニに来てくれたお兄ちゃんにはお礼にその場でわたしの脱ぎたてパンツをあげちゃう企画だけど、最終的に十人のお兄ちゃんが来店してくれました～、パチパチパチ！

それでぇ、今日はわたしのお友だちをみんなに紹介しま～す！わたしのクラスメートの瑞希ちゃんで～す！」

そう言いながら、マンコちゃんが俺と瑞希の隣に移動して、ザーメンちゃんのカメラが追いかける。
「ふふふ、最近わたしと同じコンビニでアルバイトし始めた瑞希ちゃんで～す。ふふ、瑞希ちゃんももちろん宅男お兄ちゃんの超すごい催眠にかかって宅男お兄ちゃんに恋しちゃったんだよね？」
カメラに慣れないのか瑞希がコクリとうなずく。
「ねえ、瑞希ちゃんはなんでウチのコンビニでバイトしようと思ったの？」
AVの導入らしくマンコちゃんがインタビューし始める。俺はそれを無視して媚薬入りのローションを白を基調とした陸上ユニフォームの上着にかけていく。粘土の高いローションが平均的な瑞希の胸に絡みつき、肌にユニフォームが張り付き透けさせる。
「えっと、ボクは彼氏に誕生日プレゼントを買うためにバイトし始めました…んん！」
俺がコリコリと乳首をつまんで指の腹で転がすと、瑞希の乳首が勃起してユニフォーム越しに透けて見える用になる。

「へー。瑞希ちゃんいい彼女してるね～。で、プレゼントあげれたのかな？」
「んん…バイトしてるあいだにもっと好きな人ができたからぁ…んふぅ…か、彼のことはどうでもよくなっちゃって…。はんっ…お給料は全部その人の好みのボクになるために使うことにぃぃ…んふぅ…したんだぁ♡」
俺が乳首をつまむたびに瑞希の口から悩ましく興奮に満ちた吐息が漏れる。ビンビンに勃起した明るい色の乳首がランニングウェア越しに彼女が興奮していることをカメラに見せつける。
「あらら、瑞希ちゃんいい彼女じゃなくなっちゃった。でも、いいオンナになったんだぁ。って、その瑞希ちゃんが惚れちゃった幸せな人ってどこのだ～れ？」
「はぁぁぁん…」
艶めかしい吐息とともに瑞希の腰がまるでねだるように俺のチンポの上で揺れる。
「うんっ…ボクが好きなのはぁ…ううん、わたしがぁ…はぁぁん好きになったのはぁ、マンコちゃんのお兄ちゃん、宅男様なんだぁ♡。あぁ…はぁぁん…このおチンポに恋しちゃったのぉ♡」

そう言いながら腰を浮かせて、引き締まった太ももでゆっくりと俺のチンポを素股し始める。先走り汁が淫猥な線を瑞希の太ももに残す。
「あははは、宅男お兄ちゃんなら仕方ないよねぇ、このおチンポに抱いてもらうためなら彼氏なんていらないよね」
「はぁ…はぁ…あぁぁんん！そう、そうなのぉ♡わたしは彼氏よりぃ、宅男様のおセフレになることを選んじゃったんだ♡あぁぁん！宅男様ぁ、乳首コリコリしたら、腰動いちゃうぅ。わたしの体全部知ってるんだもん」
そう言いながら瑞希が彼女の胸を弄び、乳首を弄り倒している俺の手を包み込む。まるで彼女の胸への愛撫を手伝うかのように。そしてそうすればするほど、桃色に染まって興奮した少女の女体は激しく燃え上がっていく。
「もう、すっかり発情しちゃってぇ。瑞希ちゃんとは最近までわたしはあんまり関係なかったけど、最近は大親友なんだ。一緒にお兄ちゃんのおチンポにご奉仕するのすっごい楽しいんだから。そんな瑞希ちゃんのニックネームってなんだったっけ？」

「ああん、わたしの呼び名はぁ『チン負け』なんだぁ♡宅男様のおチンポもらうともう逆らえなくなっちゃうからぁ…チンポに弱いってことでチン負けちゃんって呼ばれてるんだ♡はぁぁぁん、もう我慢出来ないぃわたしのことまたチンポで負けさせてぇ！」

「あはは、瑞希ちゃんすっかり出来上がっちゃってる♪クラスメートがこんなにヘンタイだとわたしもちょっと恥ずかいかな。でも、もう少しだけ待ってね。代わりにこれあげるから」

そう言いながらマイク代わりに使っていた極太の張り型を手渡す。嬉しそうにそれを受け取ってピンク色の舌で舐めあげる。初めは緊張していた瑞希もすっかり発情してノリノリだ。まるでビッチみたいだ。

「んんっ…チュ…レロレロ～。ああん、このバイブ宅男様のと同じサイズなんだ♡はぁ…あぁんっ…チュッ…ちゅぶ…チュルル。わたしのこと意気地なしの彼氏から奪ってくれたたくましいオトコの部分なんだ♡」

「彼氏はそのディルドー以下なんだ♪ちょっとひどいよね。でもお兄ちゃんのおチンポほんとにスゴイから仕方ないんだよね」

「はぁぁんんっふはぁ…もう、我慢できない。あぁん♡宅男様のおチンポ、わたしのチン負けマンコに突っ込んでよぉ」
浮かせた腰を前後にカクカク、まるでエッチしているかのようにグラインドさせながらオネダリする。ついこの間まで処女で、水泳一筋だったとは思えない乱れようだ。
「じゃぁ、おチンポ入れられるようにこのユニフォーム破っちゃうね♪」
そう言ってマンコちゃんがハサミでチョキチョキとランニングウェアのクロッチ部分を切っていく。既に興奮して瑞希の愛液で濡れているそこから穴が大きくなるにつれて部屋に充満するメスの匂いが俺を誘ってくる。
「あぁぁん、もういい？わたしのオマンコぉ、もう我慢出来ないの！入れたい♡入れたいんだぁ♡この私の太ももものあいだのガチガチチンポ様をぐじゅぐじゅ発情マンコで咥えこんでチンポに絶対勝てないわたしのメスをじゅっぷじゅっぷ屈服させてほしいのぉ♡」
そう言いながらまるで我慢出来ないとでも言うように腰を左右に振ってみせる。ずりずりとチンポが少女の太ももものあいだで擦れて気持ちいい。

「いいぞ、水泳部の後輩を紹介してくれたらな」
俺がそんなふうにカメラの前で命令する。瑞希は迷いさえしない。
「そんなのもちろんいいよ！何人でも紹介するから！宅男様のおチンポわたしの発情マンコに突っ込んでよぉ！！」
「あはは、チンポ入れる前から負けちゃってるね！
そんな瑞希ちゃんにおにいちゃん、コメントをど～ぞ！」
「体育会系女子のマンコ締め付けスゴイんだよ。おっぱいは少し物足りないけど、その分ケツはいい感じだから、まあ許せるレベルかな。それじゃぁ、入れていいよ」
直後温かいというより熱いと言ったほうがいいほどの感覚が股間に走る。
「んん…ふといぃ…♡」
俺に背中を預けながら、瑞希が媚びるように言う。彼女の割れ目が俺を包み込み膣壁の一枚一枚がチンポに絡みついてくる。
「んふぅ…もっと…きてぇ…わたしのマンコがぁ…喜んでいるのぉ」

艶めかしい吐息とともにずぶずぶ飲み込まれていく俺のチンポ。締め付けはなくてただ柔らかい女肉が全体を抱きしめるように包み込んでくる。とめどなく溢れて絡みつく彼女の愛液。
「はぁぁん…入っちゃったよ♡宅男様の太いのぉ…！はぁぁぁぁぁぁんん！わたしぃ…幸せ感じてるぅ…んふぅ♡」
瑞希がボーイッシュなハスキーボイスでそう囁く。男のことなど知らなかった水泳一筋の少年のような少女が俺の腕の中でオンナの喜びを知って、すべてを捧げてくれている。その喜びに股間が熱くなるのを感じる。
「あぁぁん、宅男様のたくましいのが私の中で震えてるぅ…んん♡」
そう瑞希が嬉しそうに囁く。
「ほら、みえますか～？わたしのクラスメートのマンコにぃ、おにいちゃんのぶっといソーセージがずっぷりヌップリはまっちゃってま～す！」
そう言いながらマンコちゃんが実況中継する。セーシちゃんのカメラが近寄って結合部分をどアップで写している。
「しかも、ナマですよ！ナマ！」

そう言いながらマンコちゃんの白くて細くて小さな指が瑞希のマンコに結合している俺の赤黒い肉棒を愛おしげになぞる。
「あぁん、こんなに太いの…見てるだけで濡れてきちゃいます♡瑞希ちゃんのラブジュースでトロトロにコーティングされちゃってぇ♡」
そう言ってサーモンピンク色の舌を出したロリっ子がチュプっとキスを竿の部分にして、サラサラとした舌で舐めあげる。
「ああ、いいぞ。それ」
全体を瑞希のマンコに包まれながら露出している部分をロリっ子の小さな舌でくすぐられるこそばゆい感覚を堪能する。しかも彼女の小さな指が金玉をマッサージし始める。
「はぁぁん、動いてないのにぃ、わたしのなかでチンポピクピク動いてるよぉ…んんっはぁぁん♡」
竿の根本をチロチロ舐められて動いてしまう感覚に瑞希が声を上げる。ティーンのマンコを味わいながら、しかもそのクラスメートに金玉をマッサージされつ

つ竿を舐められる。そしてそれを母親が撮影している。普通では絶対味わえない背徳感にますます興奮が高まっていく。
「そろそろ、動いていいぞ！締め付けろ」
「ハイ♡…んっ…じゃぁ動くねぇ…んふぅ…」
そう体育会系らしくハキハキと返事しながら瑞希の腰がゆっくりと持ち上がる。一番奥にはまっていたところから徐々に彼女の膣肉が上方向にしごき始める。と言っても肉棒が抜けるような感覚はない。彼女の水泳で鍛えられた股関節の筋肉に力が徐々に入り、むしろ締め付けがきつくなっていくからだ。
「あぁぁん！ど、どうですかぁぁ…？」
蕩けたハスキーボイスが俺の耳にささやかれる。
「ああ、いい、いいぞ。まるでチンポしごくために生まれてきたような体だぞ」
「うんっ、嬉しい♡宅男様のチンポしごくために生まれてきたんっ…ふぅん…ですぅぅ♡」
そう瑞希が返してくる。まったく従順で完璧なセフレだ。

「もう、イチャイチャ見せつけてくれちゃってぇ？わたしも濡れてきちゃいますぅ。でも、瑞希ちゃんは敏感だからぁ…」
そういってゆっくりとストロークしている瑞希のクリトリスをマンコちゃんの小さな指が捉える。
「ひゃぁぁぁぁんん！」
瑞希が声を上げて反応する。それとともに力が抜けて一気に一番奥まで水泳少女の膣肉がはまってくる。
「いきなりぃ…ひゃぁぁっっ、ひどいよぉ！んあっ…はぁぁん！」
膣肉が快感にうねり敏感な竿の部分を撫でるようになる。
「ほら、もっと腰を振れ」
「ハイ！ああ、(ピ)スポットにぃ…あんっあたってるぅ・・・ふあはぁ」
幸福感に満ちた瑞希の返事。
再びキュッキュっと俺の中年極太チンポを大切そうにハイティーンマンコが締め付けてくる。徐々に速度を増すストローク。チンポが全方位から締め付けられながらきつく扱き上げられる。

「はあぁん！コレ！コレいいんだ！このおチンポ大好きぃ！あんっふはぁ…宅男様のぉ…んふぅ…デカチンポでエッチするのいいんだぁ！」
俺は興奮に任せて彼女のハリのある小ぶりな乳房を遠慮なく揉みしだく。健全な陸上のトレーニングウェア越しに男の手が卑猥に這い回り、興奮に勃起した乳首がウェアを下から押し上げる。今度は快感に準備ができているせいか瑞希は喘ぎながらも背面座位で腰を振るのをやめない。
「ひゃふぅぅん！乳首もぉぉ中年オジサンにぃ…気持ちよくされちゃってるぅぅ！わたしの大好きなぁ…はぁぁん…チンポ貰いながらおっぱい揉まれちゃってるのぉぉ！んふぅぅっエッチしすぎてぇ、エッチな体になっちゃってるぅぅぅぅ」
「いやか？」
「はぁぁん！イイ！イイよぉぉ！おチンポで…んふほぉぉぉ…パンッパンッてされるの大好きぃ！コレ以外何もいらないのぉぉぉぉ」
パンパンと肉と肉が打ち合わされる。片方は贅肉のついたハリのないだらしない中年男の太もも。打ち付けられているのは引き締まって鍛えられた、みずみず

しい白い肌。少女の出すラブジュースが金玉にかかり温かい。キツくしごかれる感じは絞られるようだ。激しいストロークで泡立った先走り汁とまん汁の混合物が南川家のリビングに飛び散る。

「はぁぁん!!腰がとけりゅうう!気持ちよすぎてぇ、とけてりゅのおおお!んふっんあああああん!」

出し入れするたびに壊れた人形のように矯声を繰り返す元クール水泳少女。その体が俺の上で踊り、その小ぶりな胸をどんなに弄んでもいい。そしてついこの間まで男を知らなかった彼女の内側を思う存分攻め上げて俺の色に染め上げるのだ!

「ああっんふぅぅ、ダメ、もうイキそう!」

そこで俺は今まで瑞希にされるがままにされていたところを、今度は一気に下から突き上げる。

「ひゃあああああああんん!だめっ!らめっ!しょんなぁいきなりきたらあああ!わたしこわれちゃうううう!」

面白いように叫ぶ瑞希。

「ああ、壊してやる。もっともっと壊してやる！中年オタク専用のオナホ人形にしてやる！」
俺が叫ぶ。バンッバンッと激しくしたから突き上げる。今までと違ってペースを崩された瑞希は為す術もなく俺の膝の上でみだらに踊る。
「ああああん！してええ！わたしのことオナホ人形にしてえええ！はぁぁぁぁぁん！もう、らめっ、激しすぎりゅうううう！イッちゃう！イッちゃう！イッちゃうのおおおおお！」
その言葉と同時に瑞希の全身が痙攣し、逆エビ反る。小ぶりな胸が天を向いて突き上げられ、絶頂の潮がぶしゃあああっと吹き出して金玉にシャワーのようにかかる。チンポを包み込む筋肉のすべてが弛緩し、一瞬キュッと締めた後にふたたびあの包み込むような優しい快感に変わる。
だが、俺はイッていない。そこで止めるつもりもない。絶頂にまだピクピク体を痙攣させて動けない瑞希の体をそのままベッドの上に押し倒す。そして今度は獣のように背後から突き上げていく。
「あがっ、ひゃぁ、む、ムリぃぃ」

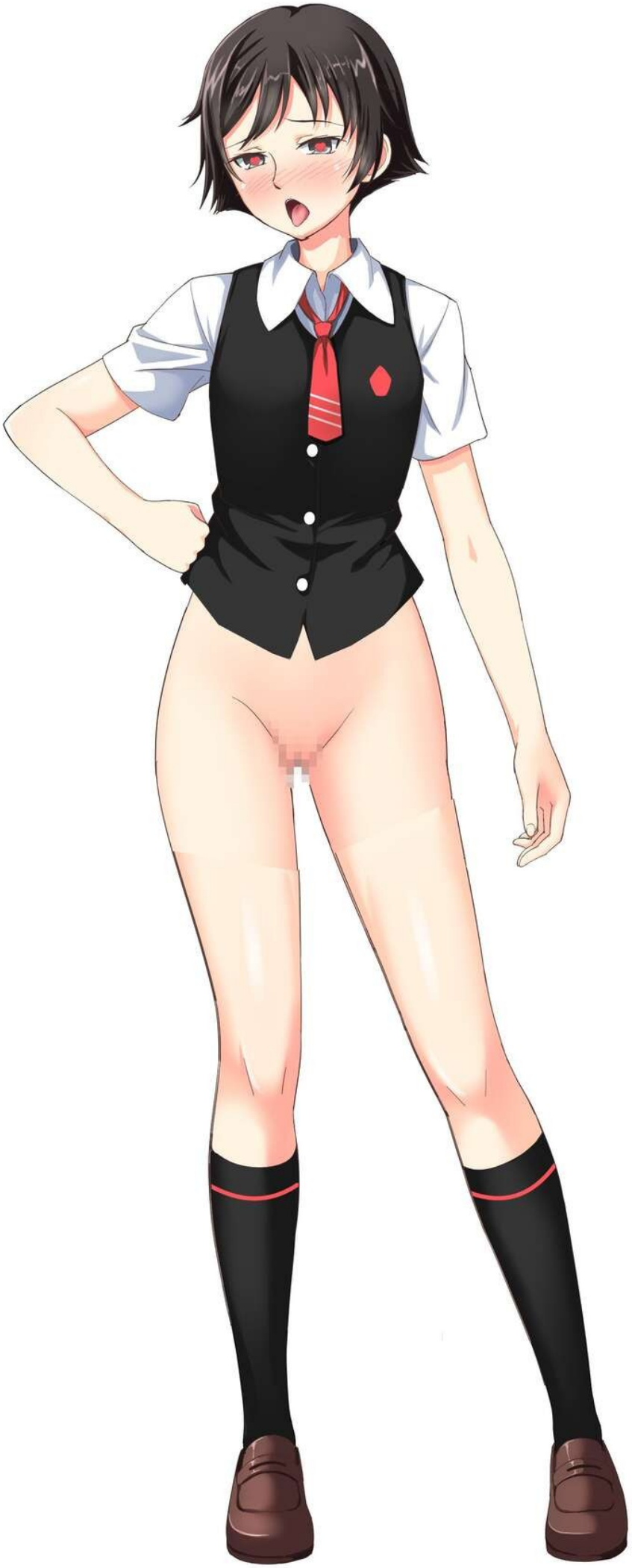
そう叫ぶ瑞希を無視して絶頂で敏感になり突くたびにうねり方を変える彼女のマンコを一気に攻めあぐねる。
「今回の来店特典は瑞希の無修正撮影会だな。店舗でお前から買ってくれたやつはそのままバックヤードに案内して、好きなポーズで撮影させてやれ。あ、期間中はノーパン勤務な」
「んあああっ、しょんなの、ムリ！ムリ！むりいい！」
絶叫する瑞希。だが彼女の体は絶頂したにもかかわらずさらなる快感を求めて俺の肉棒に貪欲に絡みついてくる。まるで喜んでいるように彼女の体が俺に絡みついてくる。
「なら、もうお前はいらないぞ」
たったその一言だけで少女の顔色が変わる。彼女の俺に弄ばれた心はもはや俺抜きの生活など想像できなくなってしまってる。恐怖からか彼女の蜜肉がうねるのを感じる。
「いやぁぁんん！しょんなのいやだぁ！わかった、わかったよ！言うこと聞くから。だから、だから宅男様のザーメン出してほしいのぉ！」

「しかたないね！」
そういって俺はニヤッと笑って１０代マンコのきつい締め付けに体を委ねる。白い肉が目の前でうねり、俺の体に徹底的に快感を与え、男汁を絞り出そうとする。
「あぁぁんふぅ！もうらめ、またイッちゃう！イッちゃう！宅男様のザーメンビュルルルルルって出てるの感じてイッちゃうのおお！！」
たっぷり数十秒に渡って少女の俺のザーメンしか知らない肉壺に欲望の汁をマーキングする。どくどくと出されたザーメン汁が少女の引く突く膣壁に降り注ぐ。彼氏がついに到達できなかった場所はもはや完全に折れのものであり、この少女も俺の所有物同然だった。

あとがき

この度は手にとってくださってありがとうございます。前作を6月の末にだしてから3ヶ月です。3ヶ月で一本できたのはひとえに協力してくださった赤羽ねねさんや無茶なスケジュールで誤字脱字チェックしてくださったかみにん氏、多忙の中でも何度もリテイクに応じてくださったナメ氏のおかげです。そうえいば、本編の赤羽ねねさんのボイスは楽しんでいただけたでしょうか？個人的には初めにナメ氏にキャラクターデザインを見せてくださった時から今作のヒロインは大好きで、赤羽ねねさんのボーイッシュボイスがつくことでどんどんヒロインの姿が出来てきて短い間ですがとても楽しかったです。

また、催眠音声は数あるのですが、催眠術にかかる女の子のボイスというのはそれほど多くないので今回の試みが受け入れられるか不安ではあるのですが、同時にクオリティ面では自信があるので、この作品をきっかけに広がってくれればと願っています。

話は変わりますが、この夏は台風に豪雨に地震と天変地異が各地で相次ぎ大変だった方も多いと思います。私の生まれ故郷の胆振も地震の被害を大きく受け、日々ニュースを食い入る様に見てしまいました。少額ではありますが9月と10月の売上の5%を北海道胆振東部地震で被災された方々や被害を受けた産業の復興に役立ててもらおうと思い、寄付させて頂く予定です。加えて、多少不謹慎な試みかもしれませんがTwitterで私のアカウント（@OjisanHentai）にハッシュタグ　#シコ報告募金　をつけてシコ報告してくださるごとに私が100円追加で募金します。

あまり長く書くと誤字脱字が増えてしまいそうなので今回のあとがきはこんなところで。再度、赤羽ねねさん、かみにん氏、ナメ氏と読者・視聴者諸氏に深くお礼を言わせていただきます。